
あの空が青い理由

太刀河ユイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空が青い理由

【Nコード】

N1140Z

【作者名】

太刀河ユイ

【あらすじ】

俺、天木竜司の趣味は空を眺めること。

仕事で訪れる町に着くと、まず俺は空を見上げる。

青空の後に決まって目に留まるのは、鳥でも、雲でもない。

村では見かけない、翼を持った人間　有翼人の姿だ。

俺も、いつかあんな風に空を飛びたいと思っている。

しかし、村では未だに翼を持つ人間への差別が残っていた。

空への憧れを許されず、有翼人と未成年の村の出入りを一切禁じる。

それが俺の村に残る掟だ。

妹の茜は賑やかな町への憧れを抱いているが、村から出る事をまだ許されていない身。

連れていけと言われても、連れていけば掟に破ることになる。

耳が痛くなるほど言われても、連れていく事はできない。

そんな俺達兄妹の生活に刺激を与えたのは、流行り者の着物とは駆け離れた法衣を羽織り、リンと名乗る一人の少女だった。

プロローグ

この村には掟がある。

『有翼人の出入り、村での交流、その一切を禁ずる』
『成人せぬ者は特別な理由なく村から出る事を禁ずる』

その掟にこれらが書き加えられたのは、たぶん俺が生まれた後の事だ。

掟なんて堅苦しい風習は、今時どこを探してもこの村くらいしかないだろう。

息の詰まるような鎖の掟は他にもある。昔は反発する者も多かったらしいが、これは自然な事なのだと言染み始めてもいた。

別に生きていけないような訳でもないし、他の村と交流がない訳じゃない。俺はそれなりに楽しくやっていけている。

村は平和そのものだった。

あの少女が現れるまでは。

俺が空を仰ぐ理由「壱」

一度だけ、俺が子供の頃に病気を拗らせて町の病院を訪れた事がある。

村から出るなど言う掟があったものの、病気となれば話は変わってくる。俺の他にも何人かこの時期には同じ病気で倒れたらしい。流行病と言う奴だ。

「せ、先生っ！ 妻と竜司は」

父だけはこの病に倒れず、俺と母親に付きつきりでした。

「大丈夫です、ここは私に任せてください」

そんな父の心配をよそに、俺は命に関わるほどの病だったのにも関わらず、町に出るのが楽しみでならなかった。村の掟で外界に出た事がなかったのもあり、町がどんなものか興味があったからだ。

町で大半の時間を過ごしたのは丘の上にある小さな病院。病室で嗅いだ木の匂いは、今でもはっきりと覚えている。

最初は熱で余裕もなかったが、次第に病室から町をゆっくり見渡す事もできるようになった。

「うむ、大分よくなったようだね」

ひげを生やした初老の医者が、俺と母親のベッドの間に入る。

「竜司くんは、もうすぐ退院できるよ。退屈だらうけど、もう少し我慢してね」

優しく声をかけてくれるその医者を見る度、俺の視線はいつも背中に向いていた。

俺の脳裏にしっかりと焼き付いている大きな背中に『それ』はあった。

焼けた肌の色よりも濃く、茶色く荒々しい……俺にはない『それ』

横たわったままの母は、あれは『翼』なのだと教えてくれた。

「先生」

「ん。どうしたんだい、竜司君」

好奇心の強かった俺は、その医者が来る度に自分から話しかけていた。

「うん。ねえ、先生には、なんで『翼』があるの？」

「はは、これはそんなに珍しいかい」

「村の人達には、翼はないよ」

「あ、そうか……。ねえ、竜司君」

「なに？」

「僕が翼を持っている事は、村の人には内緒だよ？」

「……？　なんで？」

「ここでは言えるけど、あっちだと口にしてはいけないからさ」

「？」

俺はその時、医者がどうしこんな事を言っているのかは分からなかった。

「さ、次はお母さんの方を見るね」

「うん」

数日後、母の容態が急変した。

「お母さん、何処に行くの？」

「竜司、大丈夫。すぐに戻ってくるから」

あれが、母が俺についた最初で最後の嘘だった。

「ねえ先生、お母さんはどこにいったの？」

母が戻らないまま数日が過ぎた。

不安を抑えきれなかった俺は、堪らず医者にそんな質問を投げかけていた。

「空、かな」

「お空？ 先生みたいな翼があれば、ママに会えるの？」

「もつともつと高い所だから、おじさんでも届かないな」

「……そっか」

「ごめんね」

本当の事を言われても、子供だった俺にはわからなかっただろう。

「どうやってたら、お母さんに会えるかな」

「まだ会えないけど……」

「いいかい竜司くん。人はみんな、見えない翼を持っているんだ」

医者は残念がる俺に対し、そんな事を言い出した。

「見えない翼？」

「ああ」

「僕にもある？ 飛べるの？」

「その翼は、一度だけ飛ぶ事を許されているんだ」

「一回だけなの？」

「そうだよ。そして、悪い事をしていると、その翼は飛べなくなってしまうんだ」

「いい子にすれば、その翼でお母さんに会える？」

「ああ。きつと会えるよ」

「じゃあ、僕いい子にしてる」

退院後、母のいない寂しさを埋めるため、俺はとある事に没頭した。

工作だ。

手先が器用だった俺は、町で見た有翼人に似せて、玩具を手作りましたのだ。

枝を折って、紙を貼り付ける。

それを繰り返して出来た『カタチ』を……。

「えいつ！」

飛ばす。

落下。

曲がりくねった気味の悪い様の模型が、さらに気味の悪い異様な

形に変貌した。

「うー……」

同じ形に作ったつもりでも、なかなかそれは思う動きをしてくれなかった。

変に曲がっていたりしたのが原因だろう。

何度か繰り返し返す内、家にあつた紐を持ち出したそれに括り付けた。

「えいつ！」

わずか四秒の飛行だったが、少年だった俺には心くすぐる光景だった。

木の枝と紙と紐で作られた『カタチ』は、わずか四秒の飛行を終えて地に落ちた。

「飛んだ！」

離れた場所に落ちたそれを拾いに行く少ない時間、俺は歓喜に踊った。

いつか自分もこんな風に空を飛んでみたい。

でも、俺には自由に飛べる翼がないことを知っている。

でも、玩具では四秒しか飛べない。

でも、俺は飛びたかった。母に会いたいと言つ一心で。

羽ばたきの音が背後で二つ。

俺のはしゃぎように驚いて鳥が飛んでいったらしい。

「おー」

俺は空を仰ぐと、本物の鳥は綺麗に飛び立つ瞬間だった。

そして俺はこの時見た空の色を、生涯忘れる事はないだろう。

俺が空を仰ぐ理由「貳」

ふと空を見上げる事は、誰もがしてしまふ事だと思う。

仕事忙しいだの何だの言っつて、首が上がらなければこんな綺麗な青空は見えやしない。

「空はなんで青いんだろうな」

ほどよく頑張り、ほどよく力を抜いて妹との家計を守る俺には、空を仰ぐのが楽しみだった。

「兄貴」

町の市場に店を出しているが、客足はお世辞にも多いとは言えない。暇な時間はこうやって空を見上げて、こんな事を考えている。

「しばらくは快晴が続きそうだな」

「兄貴ってば！」

「うわっ」

「あれ」

とっさに振り返ったが、俺の視線の先には誰もいない。

「ここだよ、馬鹿兄貴」

上を向いていたせいか、首の位置が高かったらしい。首の角度を下げていくと、嫌でも毎日顔を合わせる妹がそこにいた。

どうやら呆けていたらしい俺に、こいつは少々ご不満のようだ。

「驚かすなよ」

「驚かしたわけじゃないよ。反応しない方が悪いんでしょ」

俺を兄貴兄貴と呼ぶこいつの名前は天木茜。

俺の妹で、近所の女の子と比べると活発な方だ。多少子供っぽく生意気な所もあるが、兄の俺から見ても女としては整った顔立ちをしているのではなからうか。

村の中で茜狙いの男は多い。

「で、また空見てたの？ 好きだねえ」

厭みな視線と台詞が飛んでくる。溜息に混じりに考えた事だが、村の男達に一言だけ忠告したい。後悔するぞ、とな。

「子供には関係ない」

「子供扱い禁止。私もう」

「はいはい。ほらとつとと学舎まで行くぞ」

「つて、こらーっ！ 無視すんなあ！」

「別に眺めるくらい別にいいだろ。減るもんじゃないし」

「でも、掟は？」

「『空に憧れを抱くことなかれ』か？ バレなきゃいいんだよ、あのババアも人の心を読むわけじゃないし」

「はあ、出ましたよ。兄貴つては村長に反抗しすぎじゃない？」

「あのババアの有翼人嫌いがどうしようもないように、俺の村長嫌いもどうしようもないものなんだよ。あの婆がかけた厳しい掟のおかげで村の人口は一向に増えないし、村から数里離れている町に行かなきゃ口々に稼ぎにもなりやしない。いい迷惑だ」

「その掟のおかげで村の治安はいいんだけどね」

「それだけだつて。ほら、そろそろ行くぞ」

急かすように歩を進める。

「あ、待ってよ！」

俺達の家は、村の中で最西端、木々が生い茂る村はずれの小さな土地にある。

家から空を仰いだ場合、葉が空を囲んでいる形になっている。見上げる空がいささか狭いのだ。正直、その所為で家の立地には未だに納得ができていない。

隣の家はすぐそこにあるもの、なんて常識は、こんな田舎の村には通用しない。

しばらく歩くと、空が一気に広くなった。森を抜けたのだ。

「んーっ！」

おもむろに立ち止まり、背を伸ばす。

「兄貴、いちいち背伸びしないの。とったと行くんでしょ」
「はいよ」

森を抜けるとしばらくは畑が続く。村の情景は、そこに民家が点々と立てられている形だ。決して豊かと呼べる村ではない。

ちなみにこの町で畑を所持していないのは、俺達天木家だけである。

ここからまた少し歩けば、学舎、そして村の出口へ辿りつく。

「あら、竜ちゃん、茜ちゃん。おはよ」

声のした方へ振り返ってみると、近所に住んでいるおばちゃんが鍬を抱えてこちらに手を振っている。

「あ、おはようございます。朝から畑仕事ですか。お疲れ様です」
「いつものことよ。それより竜ちゃん、ウチに来ない？ 旦那が腰
やっっちゃって役に立たないのよ」

「婿入りは勘弁ですけど、手伝いくらいなら。仕事と稽古の後でに
なりますけど」

「あら、まだ村長の稽古続けてたの？」

「……あれしか特技がないものでして」

「兄貴、翼師の才能は皆無だもんね」

「うるさいぞ」

「でも竜ちゃん、お仕事は商人でしょ？ 稽古もするなんて大変じ
ゃない？」

「今は気が向いた時にしか行かないんで。では、茜を送らにゃなら
んので行きますね。行くぞ、茜」

「うん。じゃあね、お姉さん」

茜が「お姉さん」に挨拶をしている間、俺は商売道具である荷車
を引いて一足先にその場を離れた。

茜の学舎は俺達の家から一里もない場所にある。

村もそんなに大きい訳でもない為、そんなに遠い訳ではない。た
だ俺の場合、荷車を引いて歩くからか効率が悪い。

馬なんてものは金持ちが持つものだから、自分達の足に頼る他な
いのだ。

「いけいけー」

茜は俺の引く荷車の上に乗って楽をしている。
俺が茜の馬になっっている訳だな……って

「降りろよ」

「やだ。疲れたもん」

「早いよ。あのな、この荷車は兄ちゃんの売り物を乗せる物なの。
だから降りなさい」

「兄貴は自分の妹を売る気が、この鬼畜外道め！」

「殴っていい？ 殴っていいよね？」

そこからしばらく続いた言い合いにも疲れ果て、とりあえず学校
までは乗せていくことにした。

学舎は教室が全学年統一されていて、年が違う者でも必然的に同
じ教室になる。

俺はとっくに卒業しているから関係ないのだが。

「じゃあ、俺は町行ってくるから」

「はい」

いつも俺は茜を学校に送って仕事に出る。兄妹で学校に通ってか
なり経つが、卒業してもこれを繰り返すのは正直しんどい。まして
や成人してからは稼ぎに出ている為、途方もない労力を消費してい
る気がする。

退屈しないのはいいが、茜を乗せた荷車を引いていくこの状況は
どうにかしたいと考えている。

……ほどなくして、茜の学校へ辿り着く。

「あら、竜司くん」

「あ、先生。ども」

茜を送っていく都合上、卒業しても尚、先生と顔を合わせる羽目になる。

同じ村だから、仕事帰りにバッタリなんて事も少なくなはないんだけど。

「これからお仕事？」

「いつも通りです」

「毎日辛くない？ 売り物を馬もなしに引いているんでしょう？」

「もう慣れましたよ、ついでに茜も乗せてますし」

「あら、人身売買には手を出しちゃダメだからね」

「先生、乗ってるものがすべて商品ってわけじゃないですから……」

「冗談よ。がんばってね、もう成人なんだから」

「はい」

「兄貴、今町で何が流行ってるか調べてきてよ」

「何が流行ってるかわかっても、どうせ行かないから意味ないだろ」

「いいじゃん、別に」

「わかったよ」

「あー、私も町にいきたーい」

茜は連れていけとばかりに飛び跳ねる。

「ダメだ」

「なんで」

「村の掟。子供が村出ちゃいかんの」

「ケチ」

「なんとも言え。それじゃあ先生、よろしく願います」

「ええ。ほら、そろそろ授業始まるわよ」

「はい。ねえ先生、私昨日習った術式できるようになったよー！」

「あら、すごいじゃない。やっぱり茜ちゃんは才能あるのよ」

先生と茜の後ろ姿を確認しつつ、俺は町の方面にある村の出口へ。村から町への移動は、荷車を引く労力を計算に入れても二刻を要する。数カ月でようやく慣れてきたのはいいが、それでも距離が縮まった事にはならない。鍛えている方だが、この往復はやはり体に堪えるものがある。

市場でぶっ倒れたら商売にならないよな。何か対策を考えないと。行くか、荷物も減ったし」

なんとか正午前に到着できた。

空を仰ぐと、村では決して見る事の出来ない光景が広がっている人だ。

翼を持った人間が優雅に空を飛んでいる。子供の頃に一度だけ見たが、今ではすっかりこの光景に慣れてしまった。

「さて、始めるか」

休憩したいのは山々だが、そうはいかない。休みの日以外は夕方まではこの町市場の一角にて雑貨を売るのが俺の仕事なのだから。荷車を背に置き、客足の波へ向かって両の手を思いっきり叩く。

「天木が来ました！ 女性必見の髪飾り、新しい型ができてるよー」

俺の声に反応して、女性が数名こちらに視線を送ってきた。

今言った髪飾りは町の女性に人気があるようで、俺と茜の食いつ持にはなくてはならない存在となっている。

と言うより、今はこれだけ言っていれば食べていける。

「天木さん。それ一つ」

「はい、どうも」

さっそく髪飾りが売れた。ありがてえ、お客様は神様です。

ただ、なぜ他の商品はまったく売れなんだ。

ついでに、という感じで常連さんが買ってくれる程度だが、それだけでは赤字は免れない。なにも売れないよりはマシだろうがな。

「もうちょっと、グツと来る商品の案はない？ お姉さん」

今買ってくれたお姉さんに話を聞いてみる。こういう女性からの意見は特に重要だからな。

「そうねー、もういつそ髪飾り専門店にしちゃったら？」

「そんな身も蓋もねえ事を言わないでくれよ」

客との談笑ついでに他の商品を勧めて売っていく。今日は順調に売り上げが伸びている方だ。ただ順調に売れているのは髪飾りだけなのは、いつものことである。

髪飾りの流行が過ぎれば、俺の店の儲けはほぼなくなってしまう。これも、何か対策を考えなければならぬ。

今後の議題が増えたところで、俺は逃げるように青空を見上げた。

俺が空を仰ぐ理由「参」

「塩、少なかつたかな」

握り飯片手に手団扇を仰ぎで、俺は炎天下を拝んでいた。

「あんちゃん、使つかい？」

隣の店から声、それと同じく手が伸びてきた。

この市場ではよく顔を合わせるオヤジさんが売りものであるう小さな団扇を差し出してくれたようだ。

「お、いいの？」

「んな暑がつてたら客も暑がる。客が帰る、今日の売り上げも変わる」

「ちげえねえ。使わせてもらいます」

団扇を受け取り、掌の数十倍心地のいい風を満喫する。

「あー、効く」

「それにしても今年の梅雨は降らねえな」

「梅雨を忘れて夏になっちゃったって感じですよね」

「雨だと客足が減るから、ありがてえのはありがてえんだがな」

野外の市場は、雨が降るか降らないかで大きく客足が変わってくる。

このまま晴れ続けてくれてもいいが、ここの暑いのも考え物だ。作物だって雨が降らないとまともに育たない。買う飯がなくなっちゃうんだよな、難しいもんだ。

「でも、しばらくは晴れると思いますよ」

「ん？ どうしてそんな事がわかるんだよ？」

「ずっと空ばっかり眺めてたからだよ。雲の形がいつもと違うでしょ」

「俺にはどれも美味そうに見えるぞ」

「……そっすか」

「で、雲の形がどうしたって」

「あの雲の形。それと、最近暑いですよ」

「そうだな」

「それも蒸し暑い感じ。四年くらい前にも同じようなことがあったんですけど、たぶん近いうちに大雨が降りますよ」

「へえ、そんなことまでわかるのかよ」

「当たらない事もありますよ。お天父さんの気まぐれですから」

「本当にそろそろドバーツと降ってくれないもんかね」

「俺の予想が正しければ、あと四日以内には」

「傘でも作っておくか？」

「いや、前と同じなら嵐ですね。傘なんて役に立たないくらいの大
きいのが来ます」

「じゃあ、板と釘だな。嵐が来るならそれが一番売れるはずだ」

「仕入れておくんですか？」

「あんちゃんを信じるよ。博打でもしてみるかっけ気分だしな」

「最近赤字続きで、そろそろ手を打とうと思ってたんだよ。……か

あちゃんだっけ怖いし」

「は、ははは……」

炎天下に乾いた笑いが消えていく。それからしばらく客足は途絶えた。

「しかしこの暑い中、女性の方々は余計に暑そうな服装ですね」

市場は昼にも関わらず人だかりができています。その中の四割を埋める女性達は、年代に関わらずそのほとんどが着物姿だ。

「あー、かあちゃんが言ってたっけな。若い女の間じゃ流行ってるんだとよ。ほれ」

オヤジさんが指さした先では、女二人が歩きながら談笑に浸っていた。

「ついでに。左にいる女の頭、見てみる。あれ、あんちゃんの髪飾りだろ？」

「あ、本当だ」

二人の内、左を歩いている女性が派手な着物を着こなした上で、頭に地味な髪飾りを付けている。

「あの地味さ。間違いなく俺の作った髪飾りだ」

「着物に比べちゃ確かに地味だわな」

「着物が派手すぎるだけでしょ」

「っと、こっち来るぜ」

「ほら、ここ！ この髪飾り、ここで買ったのよ」

近づいて着た女性二人組が、俺とオヤジさんの店の前で盛り上がり始めた。どうやら、髪飾り目当てでやってきたらしい。

「いらっしやい」

「いいねー、口コミで商品が売れるってのは」

「他はまったく売れませんか」

「着物に合いそうなのがいっぱいあるわね。んー、買ったちゃおっか

な

「ありがとうございます。って、本当に髪飾り以外が売れないな…

…」

「ご、ごめんね？ もう持ってる物ばかりだからさ」

「いや、謝られても困りますって」

それからしばらく、その女性二人組は店の前を陣取って動こうとしなかった。

「どれにしようかなー……」

このように、髪飾りを勧められた方の女性が、どれにしようか悩んでいるからである。

今日は人も来ないみたいだからいいんだけどさ。

「まったく優柔不断なんだから。にしても、暑いわね」

「そうだね。んー……」

髪飾りを勧められた女性が、もう一人に相づちを打ちつつ、髪飾りを見ようとしゃがみこむ。

「もっと涼しい格好の方がいいんじゃないか？」

「涼しいの……？」

少し間を置いて、軽蔑の眼差しと共にこう呟く。

「天木さんのスケベ」

「なっ、俺はそういうつもりじゃー！」

「冗談よ。ほーら、とっとと決めちゃいなさいよー」

「あとちよっとー」

「もう」

髪飾りをした女性客は、息をもらしつつも笑顔で長期戦を覚悟したようだ。

すると、しゃがんでいた女性が厚い着物で首を扇ぐようにパタつかせる。

当然、その目立つ胸がチラつく訳でして、ね……。

「お、お客さん！ 見える、見えるって！」

「大丈夫よ。なに、見たいの？」

髪飾りした方の女性客だ。暇だからと言って俺をからかうのはやめてくれ。

「いや」

「見たいです」

と、隣にいるオヤジさん。

「正直ねー、団扇買います」

「あ、私も」

二人の女性客が、オヤジさんの店から団扇を購入した。

「初めからそうしてください……」

「てか、嬢ちゃん達。背中の中で飛ばせば涼しくなるんじゃないの」

オヤジさんが指さしたのは左の人の背中だろう。

「翼？ お姉さん有翼人だったんだ」

着物で翼が隠れているからわからなかった。

「あら。珍しくもないでしょ？」

「すいませんねー、俺は『田舎者』なんですよ」

「てことは、あの村の人？」

「ええ」

「なるほどね。でもおじさん、こんな所で飛んだら迷惑ですよ？」

それに、着物で飛ぶとお腹が苦しいの」

「そういうもんかい」

「手入れとかも大変だしね」

「ほお。まあ、良い女ってのは、翼から違うもんなんだよ。ねえち

ゃん、商売終わったら一緒に飲もうぜ」

「お断りですよ」

「手厳しいねー」

「よーし、これください！」

しゃがみこんでいた女性客が髪飾りを二つ、俺に差し出してきた。

「まいどありー」

市場に男の大声が響き渡ったのは、ちょうどその時のことだ。

俺が空を仰ぐ理由「参」(後書き)

ここから物語が少しずつ動き始めます。
できれば最後までお付き合いくださいませ。

俺が空を仰ぐ理由「肆」

「だからよ、なんで言う事聞いてくれないのかなあ……」

なんだなんだ？

おい、誰かが男二人に絡まれてるぞ。

相手は？

わかんねえ、顔見れねえもん。

いつの間にやら、市場の真ん中に人だかりができていた。どうやら、面倒事が起きたようだ。

「あんちゃん、出番だぞ」

オヤジさんが売り物であろう木刀を差し出してくる。

「またですか」

「ほら、行けつて。騒ぎに客が持つていかれるぞ？」

「むしろ収まる頃には人通りが増えていくでしょ」

「騒ぎが収れば、野次馬はそのまま帰っていくだろ。それこそ、俺らの店には見向きもせずにな」

「あー、わかりました！ わかりましたよ！」

多少面倒だとしても、取るべき行動はこれが一番なのかもしれない。俺は観念した。

「これの代金は？」

受け取った木刀をオヤジさんにチラつかせる。

「いらねえよ？ こついつ時の為に置いてある奴だから」
「……さすが」
「すみません、ちょっと勘定待ってもらえますかね」
「いいですけど」

女性客二人は何をするのかわからないと言った感じた。
それは俺も同じ。こんな面倒事に首を突っ込むなんてのは、自分から見ても理解し難い。

木刀を背中に隠しつつ、人だかりの近くまで行く。

「何があつたんだ？」
「おお、いいところに来たな。いやさ、見た方が早いよ。ほら、あれあれ」

視界へ入った手近な野次馬から見知った顔を選び、現状を聞く。
すると、話しかけた男は指差しと一言で済ませた。

「来てもらわないと困るんだって。ほら！」
「い、嫌です！」

確かに口で言うより、見た方が早かった。
男が二人がかり、黄金色の法衣で顔を隠した女を促そうとしている。

「だ、誰か助けてください！」
「だあ、こら！ 大人しくしろって！」
「嫌ですってば！」
「おい」

俺のあげた一言に、野次馬達が向き直ってくる。すると、こいつらは一斉に、なんだなんだと視線を送って来た。

俺はこの瞬間が一番嫌いだ。法衣の女に絡んでいた男二人のドス声よりも、こちらの方が俺にとっては心臓に悪い。

「大の男二人がそんな事してて、恥ずかしくないのか？」

「るっせえな！」

「客がこっちに集まって迷惑してんだよ。見に来てみたらこれだ、とつとと帰ってくれ」

「はあ？ 別にいいだろ、どうせてめえの店に行く奴なんかいねえだろうしな」

「なっ……!!」

「おい、構うな。とつとこの女連れていくぞ」

「は、放してください!!」

もう一人の男が俺とガラの悪い男の間に入ると、法衣の女の腕を掴む。

「客足は悪いけど、お前らに言われる筋合いはねえぞ!!」

「確かに俺らには関係ねえよな。何してようが勝手じゃねえか。おら、行くぞ」

「やっ……!!」

法衣の女は尚も抵抗している。まだ顔は見れないが、そんなことはどうでもいいんだ。

「そうかよ。お前らも訳ありみたいだけど、じゃあもう関係ねえな」

「何の事だよ」

「俺も勝手にやらせてもらう。そこの女に手を貸すぞ!!」

「やっつたれ天木ィ!!」

野次馬達の盛り上がりように比例して、男二人の表情が苛立ちに染まっていく。

「うるせえぞてめえら！」

ガラスの悪い男が叫ぶと、野次馬達は一瞬静まり返った。男の方は、懐に手を突っ込み、もう一人の男に目配せをする。

「お、おい！ 術式札は使うなって依頼だったろう！ ここで騒ぎを起こしたら依頼料が」

「るせえ！ ここまで舐められたら、商人と言えども痛い目見てもらうー！」

自棄でも起こしたのか、男は声を荒げながら、それを取り出した一枚の札だ。

それがただの紙切れでない事は、ここにいる野次馬達、そして取り出した当の本人も知っている事だろう。

「チツ。俺は知らねえからな！ おい早く来い、巻き込まれるぞ！」
「嫌ですつてば！」

舌打ち混じりにこの場を離れようとさせた男の誘導も、法衣の女は拒否する。

札を掲げた男はその仲間の動向すら見えなくなっているのか、こんな事を口にした。

「てめえらとつとと道開ける！ 術式ぶちこめられてえか！」

男の荒げた声に、野次馬達の顔色が変わっていく。

「……ッ」

一人が振り返り、その場を去ろうとしたのだろう。

人が波紋の如く、けたたましい悲鳴と共に次々と散らばっていく。残ったのは男二人と俺、そして法衣の女だけになってしまう。

「こんな乱暴な使い方、学舎で習った覚えはねえぞ」

「ケツ。おい、とつととずらかるぞ。役人が来たら面倒だ」

「待てよ」

「ああ？ てめえも早く消えろ！」

「嫌だね。あーあ、客足なくなっちゃまったじゃねえかよ」

振り返ると、先ほどまでいた女性客二人もいなくなっていた。

「せっかく捕まえたって言うのによお……」

客足がただでさえ少ないのに、なんてことをしてくれたんだと、だんだん目の前の男達に腹が立ってきた。

一步、男達に近づく。距離一丈と八尺、背中に隠している木刀を握る手に力が入った。

「そ、それ以上近づくな！」

男が札を前に突き出したその瞬間、俺は地面を蹴りだした。男の視界は札で一部隠れている。故に反応が遅れたのか、俺が男の右腕に向かって木刀を薙ぐ間、一切の抵抗がなかった。

「いッッ！」

札は主の手を離れ、ゆっくりと落下していく。

「しまっ
」

男がそれを掴もうと左手を伸ばす。しかし予測もつかない空中を舞う札の動きに、男はそれを手にする事はできなかった。

紙を追って屈む形になった男の顔の右側面めがけ、俺は容赦なく一蹴をかました。

手ごたえは充分。体勢が悪かったのか、俺の蹴りが予想以上に効いたのか、男はこれでもかと転げていく。

「て、てめえ！」

法衣の女を抑えていた男が逆上し、手を突き離れた。

抑えられていた法衣の女がその好機を見逃すはずもなかった。

「こ、こら逃げるな！」

逃げる女を追おうとするが、

「待てこら」

「ひっ！」

俺はその男の襟首を掴み、制止させる。先ほどの木刀と派手な蹴りで、かなり怯えているようだ。こいつの相棒は既に気絶している。

「依頼とか言ってたな」

「そ、それが？」

「誰の依頼だ」

「そ、それは絶対に言えねえ！」

「なら役人に突き出しちまうが、構わないよな？」

「ま、待ってくれって!」

「往生際が悪いぞ」

「わ、わからないんだよ」

「あ?」

「顔を隠して、横にいた男が代弁していた。それに俺ら、そいつらに秘密を握られていたみたいで……さ、逆らえなかったんだ」

「そんな話を信じるって?」

「頼む、見逃してくれ!」

「横にいた男の特徴は?」

「む、無翼人だ。それしかわからねえ。依頼人は影だけしか見えなかった……」

無翼人。

有翼人とは正反対の意味で、翼を持たない人間のこと。

「何もわからなねえのと同じじゃねえか」

「あとは声しかわからねえよ!」

「なんかねえのか?」

「……………」

「おい」

「依頼人と男がいた場所に、こんなもんが落ちてた。で、でもそいつらの物とはわからないぞ」

「寄せ」

懐から取り出され、震える手で渡された。

一枚の羽根だ。

「黒い、羽根?」

町中で有翼人達を見かけるが、黒い翼を持った有翼人は見ない。

それは俺が田舎者で、直に有翼人を見る機会が少ない所為もあるのかも知れないが。

「依頼人は有翼人だったのか？」

「影だけだったから、そんなことまではわからねえよ」

「……はあ」

特定するのは難しそうだな。影だけなら翼の色なんてわからないだろうし、着物の下に翼を隠していたのなら尚更だ。

俺は男の襟首を突き離し、こう言い捨てる。

「行け」

俺の言葉に驚いたのか、男はきよとんとした顔をこちらに向けた。

「い、いいのか？」

「女はさっさと逃げちまったしな。こいつ背負って、町を出ちまえ」

「お、おう」

「次にこの市場で騒ぎ起こしたら、すぐ役人に突き出すからな」

「ひ、ひいッ！」

俺が促した通り、男は気絶した相棒を背負い、見事な逃げ足で去っていった。

見えなくなると現場には野次馬達の大量の足跡だけが残り、虚しく乾いた風が俺の前髪を靡かせた。

先ほどまで市場を賑やかせていた人達はどこにもいない。いるのは俺の剣の腕を知っているオヤジさんと、近場の店主達だけだ。

「オヤジさん達はなんで逃げないの」

「あんちゃんの活躍を見たかったんだよ」

「物好きですね」

他にも隠れて見ている奴らがいたのか、ちらほらと姿を現し始めてきた。

「すげえや天木さん！」

「商人より用心棒の方が才能あるんじゃない？」

「うるせえ」

「しつつかし、術式札を振り回すなんて、野蛮な連中ね」

「おい触るなよ、術者以外の奴が触ると怪我するぞ」

「俺は構わねえけどな、つと！」

戻って来た野次馬達の皮肉を受け流しつつ、木刀の切っ先を地面に向け、思い切り突き刺した。狙ったのは先ほど男が落とした紙切れだ。

通称『術式札』。

本来、術は有翼人やそういう類の修行をした巫女のみが扱えるもので、それを誰でも使えるようにしたのがこのお札なんだそうだ。昔は妖怪退治に使われていたらしい。

術式に用いる札は破けていたり、札に書かれている文字や記号が潰されたりすればただの紙に成り下がる。これでこの札は無力化された事になる。

「相変わらず良い腕だな」

と、オヤジさん。

「その代わりに術式は札まったく使えないけどな」

「誰でも得手不得手があるだろう」

「便利な言葉だな、心が軽くなる」

「剣は誰から教わったんだ？」

「村長と学舎の先生。術式を教えられるのも今あの村ではその二人だけ」

「へえ。術式は俺も苦手だけど、基礎もできねえのか？」

「才能皆無って言われたよ」

「そ、そりゃあ気の毒にな」

「稽古は稽古で、空眺めている暇があったら素振りでもしてろってよく竹刀で叩かれた」

「厳しいんだな」

「厳しいっていう言葉で表現するのはなんか違うな……。最近は何も触れもなく俺に向かって薙刀ぶんぶん振り回すようになったし」

「元気だなオイ」

元氣って言うのも少し違うと思うんですけど。

「おかげで稽古がいつも命がけです」

「だからあんな動きができるのか。若いのにすげえな」

「どうも」

騒ぎが収まったのを感じ取ったのか、野次馬達は続々と戻って来た。

「ほら、客が戻ってきましたよ」

先ほど預かった髪飾りを品の元に戻し、オヤジさんに向き直る。

「あれは野次馬って言わないか？」

「……あれは、客です。きつと」

自分にそう言い聞かせるように、俺は所定の位置に戻った。

俺が空を仰ぐ理由「伍」

夕刻が近づいて来た。空の色に赤みがかれば、俺が店を閉める合図。

「売れない。商品が減らない」

「と言うより、野次馬達から質問攻めで商売にならなかったな。明日もこんな感じだったらどうしよう……」

「今度からあんちゃんが騒ぎを起こしたら、そのまま店を移動させる事にするよ」

「いや、本当にすみません」

「って、別に俺が騒ぎ起こしたわけじゃないですよね!？」

あの一件から数刻経ったが、野次馬達と役所の人間が先ほどの騒動の詳細を聞こうと詰め寄って来ていた。今はその波も落ち着いたが、同時に先ほどとは打って変わって人の通りが悪い。一番多い時間帯の一割程度と言ったところだろうか。

オマケに今日は髪飾りの売上も芳しくない。いつもならもう少し勢いよく売れていくのだが、今日はその勢いがない。やはり野次馬達が店の前を陣取っていたせいだろうか。

「どうしよ」

「伸び悩んでるな」

「それはそっちも同じでしょ」

商品の雑貨達は嵐の爪痕の如く、売り場に残っている。

「ははっ、もう少し工夫しなされや」

「オヤジさんもな」

「またかあちゃんにドヤされる……」

俺も茜になんて言おう。売上で飯を買って帰る予定だったんだが、いつも以上に質素になるかもしれない。

「んじゃ、お先に」

「おう」

虚ろ目なオヤジさんと別れ、俺は町の出口へと向かう。

荷車を引いて二刻山道を歩く。慣れたとは言え、それを毎日繰り返していけば、さすがに足が休ませると駄々をこね始める。休んでやりたいのは山々だが、それをするると帰りがさらに遅くなってしま

う。

町に住めばこんなことをせずつに済むのだろうが、置いて行く事出来ない茜がまだ成人を迎えていない。

成人、病人、城へ働きに出る者以外は村を出る事を許されない村の掟が、俺にこんな苦勞を強いているのだ。

親のいない俺は、誰かに茜を任せることはできない。週に一度戻って生活費を渡すと言う方法も考えた。だが、その間俺が止まる宿はどうする？ ないのだ、オヤジさんには世話になってばかりだし、奥さんや子供もいる。

妹の茜と村の掟。山道と疲勞。すべて俺が苦勞を背負えば解決する問題ばかりだ。

「厄介な掟作つてくれるよ、あのババア」

村からの外出許可をもらった日にはいろいろ村長に話を聞かされたが、途中で抜け出してきたので半分も聞いていない。

茜は町の流行りを知りたがっていた。派手な着物が流行っていると教えておこう。

家の金じゃ着物は高価なものだから、教えるだけになるけど、今はそれだけで我慢してもらわないとな。

……。

「あと、少し」

村の入口が見えてきた、ここが見えればあとは楽。下り坂しかないからな。

「あーにーきー」

坂の下。村の入口に立って手を振るのが一人、茜だ。

俺が近づくとつれ、茜の手を振る速さが遅くなっていく。坂を降り切ったところで、茜は村の敷地を少しはみ出して俺の方へと駆け寄って来た。

「おかえり。商品売れた？」

「大繁盛過ぎて商品が足りなくなつた」

「後ろの商品達は何？」

「おうおう、てめえ荷車必死で引いてきた兄貴に言う言葉がそれか」

「じい〜」

「……………」

「じい〜」

「俺を見るな、惨めになつてくる」

「でも髪飾りはいつも大量に売れるのに、今日はまた賑やかなまま

帰って来たね」

「いろいろとあったんだ」

「髪飾りの在庫がそろそろなくなりそうだよ？」

「んー、売れなくなる反動が怖いな。茜、また別の案くれよ」

「なんですか成人商人。妹君の意見に頼るんですか？」

「実際、そっちの方が売れてるからな」

そう、実はあの髪飾りの商品、茜の案として採用したものだ。最初は茜の髪飾りを作っただけだったのだが、

試しに作ってみたら出来がよかったので、売りものにしたらこれが大当たりだった訳である。

「んー。何にも浮かばない」

「いきなりは無理だよな。いいよ、帰って飯にしようぜ」

「はい」

「うーん……」

茜の作った夕食を前に、俺は一人唸っていた。

「どしたの？」

「いや、飯が美味しいなと思ってな」

「おいしいといけなかった？」

「別にまずい飯が食いたいなんて言っていないさ。ただ、お前の腕なら将来町で飯屋出せるかなと思ったただけだ」

「それ、褒めすぎ」

言われた本人はまんざらでもなさそうである。

「でも洗濯とかやらせるとまったくダメなんだよなあ」

「ま、まったくダメって訳でもないよ？」

「ほー」

「ほ、ほら。少しばかり苦手になるっていうか、鈍くなっちゃうっていうか。兄貴だってそうでしょ？ 剣術はすごいのに術式はからっきし」

「術を諦めたからこそ、稽古に力が入ったんだ。よし、ごちそうさま。飯は美味かった」

「すつごく引つ掛かるんだけど。その言い方」

「んー、お前の飯売り出したら儲かるかな」

「移動中に悪くなっちゃうんじゃない？ 最近はこの暑さだし」
「となると保存食か」

二刻も使って仕事場に行くからな。いいかもしれない。

「作れるか？ 髪飾り以外の荷物減らせば入るだろうし」

「あっても売れないしね」

ぐさつ。

「今槍が通ったぞ、俺の胸に」

「ごめんごめん。今からだと時間かかるから、倉庫にある奴持っていけばいいんじゃない？ まだ余裕あるでしょ」

「わかった、明日は一日稽古する予定だから、明後日の朝積んでいく」

「ふつふつふつ。ならば……」

怪しい笑いをこぼしながら、茜は奥の部屋へと消えていく。

「茜特製の味噌も乗せていくといい！ 自信作だから！」

小さな胸を張りつつ構えた茜は、足元の小壺を俺に見せつけて来た。

「ありがとよ。そうだ、お前町の流行り知りたがってたよな」
「え、うん」

この暑い中だが、町では着物が流行っている。
子供も親に言われて着る場合があるらしい。親子連れは今日見なかったが、オヤジさんの家がそれなのだそう。

「着物か。わかってても着れないよ。家にはお金ないもん」
「それ言わないの。なんだったら成人記念とかに買ってやる」
「ほんと？」

「お前の兄貴が嘘ついたことあるか？」
「商品売れたって言った」

「すいません」
「ま、いいや。待ってるね」

「約束破るかもしれないぞ、金がないって」
「そうだったら諦めるよ。自分で稼ぐし」

「……苦労かけるな」
「それは言わないお約束だよ？」

その台詞こそお約束だ。

「町の夫婦でもこんな会話しないぞ」

「別にいいんじゃない？ 夫婦じゃないし」

「そうだな。明日早いし、寝るぞ」

「はぁーい」

茜は成人への楽しみが、また一つ増えたようだ。町へ出るのももちろん、着物を着て市場を回る。嬉しそうにそんなことを話していた。

「今はそれしか付けられないけど、な」

寝入った茜が手に握っていたのは俺の作った赤い髪飾りだった。我ながら、地味な形状と色合いだ。

贈り物としては成功と言っていだろうが、それ付けて町歩けるようになる頃には、着物の流行りが既に終わっている。

「難しいな……」

目が覚めた後は割と意識が冴えていた。

外でした物音がその原因だろう。外で人が倒れるような鈍い音がした、それもいきなりだ。

「んあ……あにきい、どつたのー？」

「あー、寝てる寝てる。ちょっと外見てくるだけだ」
「ん……」

眠気に負け、茜はまた布団でまた寝に入った。

耳を澄ませば物音よりも、茜の息遣いの方がよく聞こえる。

「寝るの早いな」

俺は物音が気になってそれどころではなかった。

「裏から、だったよな」

物音は割と遠かったから、泥棒と言う事はないだろう。

周囲に気配がないから、これから侵入するってことでもないと
思う。

「散歩がてら、見てくるか」

寝巻きの上から服を重ね着して外へ出る。

「さむ……」

だが、地面が濡れていない。雨が降った訳ではないようだ。

「こりゃ、明日も炎天下か」

山の天気は変わりやすい。だけど、まったくわからない訳じゃない。
夜冷え込むようなら翌日の天気は晴れ、それも恐ろしく暑くなる。

しばらく団扇が手放せそうにないな。

物音を追って外まで来たはいいが猫一匹いない。

「気のせいだったのか？」

よし、寝よう。

そう思って、裏口から布団への直行を決め込んだその時だった。

「天木！」
「ん？」

呼ばれて振り返ってみれば、二人、三人、四人……六人の男衆が松明を掲げてやってきた。

「こっちに誰か来なかったか」

俺は少し考えてから、やってきた男衆を指差してこう言い放った。

「あんたら。それも夜中、集団で」

「いや、そうじゃねえって。他に誰か来なかったか？」

「物音が気になって出てきたんだけど、たぶんネズミだと思う」

「そうか」

「何かあったんですか？」

「実は」

「オイ」

途中、口を割りこませて、別の男がそれを中断させる。

「すまないな。この辺に山賊が迷い込んだってんで」

怪しい……。

咄嗟の嘘か、とりあえず誰か探しているのは間違いなさそうだ。
ま、触らぬ神に祟りなしだ。関わらないでおこう。

「そうですか」

「茜ちゃんの傍にいてやんな」

「そうします、山賊なら仕方ない。気を付けてくださいな」

「ああ」

早々に会話を切り上げ、松明六本の明かりを見送った。

「なんなんだよ……」

今のは確かに村の男衆だ。村長の家にいる使用人も混じっていたようだが、本当に何かあったんだろうか。

結局物音の正体はわからず仕舞い

「ッ！」

視界の隅で何かが動いた。

それと、茂みからの物音。今度はハッキリと聴こえて来た。

「……山賊か」

身を守る武器か何かを持ってくればよかったと思いつつ、一步後退。

(待て、茜が中で寝てる。家に近づける訳にはいかない)

下げた足を、そのまま振り子のように前へと進ませた。

「おい、誰だ」

茂みへ向かって話しかけて見るが、反応はない。

「あの男共はいない。俺達二人だけだ」

暗がりにも目を凝らしながら、茂みの中を覗き込むように近づいていく。

男衆が松明率いてやって来たあの騒がしさは微塵も残っていないかった。

「……………」

何尺ある？

そう考えた時、葉が擦れる音が俺の耳に流れ込んできた。

「ぐっ！」

とつさのこと身構えるが、音がただけでなにも起きない。

「……………おい？」

「う……………」

違う、山賊なんかじゃない。

直観に従って茂みに駆け込み、邪魔な葉を掻き分けていく。

「おい！」

「ひッ」

聴こえてきたのは、あまりにか細い声だった。

見えたのは、暗がりには浮かぶ控え目な黄金色の法衣だ。

「あ、あの」

口を開こうとすると、その顔が月明りに照らされた。

そこにはとびきりの美人がいた。こんな美人、村でも町で見た事が……………。

「あれ」

こいつ、今日村で連れて行かれそうになってた奴じゃないか？
法衣の色も似てる。ところどころ穴があるけど、山道でひっかけて
たんだろう。

「お前、昼の町にいたよな」

「え、あ、あなたはあの時の方ですか？」

「どうしてこんな所に？」

「それは……」

少女は法衣で顔を隠してしまった。どうやら言いづらいらしい。
体も法衣隠れていたが、随分と細見であることがわかる。

昼も頭を限界まで隠していたから、この法衣は目立ちたくない故
のものだろうか。

だが、先ほどの月明かりで、少女の顔は一瞬ではあるがハッキリ
と確認できた。

法衣の少女は依然、俯いて俺の視線を拒絶するように黙り込んで
いる。

「お前、追われてるのか？」

「……………」

肩を震わせていた。それは法衣の上からでもわかる。

「怖いのか？ 大丈夫、あの男衆は行っちゃったよ」

少女は俺の言葉に耳を傾けてくれたのか、ゆっくりとこっちを向
いた。

「事情はあとでゆっくり聞く。家に来い、妹起こして何か作らせるから」

こうやって家に連れ込むと、何かされるんじゃないかと思われるかも。

ただ、妹と言う単語で彼女の表情が変わった。

人がいる、それも自分と同じ女性。言葉だけで信じるのもどうかと思うが、ここは言わないよりマシだろう。

どうやら、それで安心してくれたらしい。

法衣の少女は控え目にだが、頷いてくれた。

「あは、あったかい」

法衣の少女は外で冷えた体を囲炉裏と粥飯で暖めていた。

「ご、ごめんなさい。突然だったからお粥しか作れなくて」

「構いません。突然だと言うのに食事まで用意してくださって……」

「茜も悪いな、寝てたのに」

「まだ眠いけどね。それで、兄貴。こんな綺麗な人、どうやって連れて来たの？」

「町で」

「あの、そのの茂みなんですけど」

即訂正されてしまった。

茜に何か聞かれると素直に答えたくなくなってしまう。でも町で会ったのは事実だぞ。

「あらあら。えっと、私は茜。天木茜。こっちの馬鹿兄貴が竜司」

「馬鹿は余計」

「馬鹿が竜司」

「おい、馬鹿が余計なんだよ！ 誰が兄貴抜けと言っただ」

「茜さんに、竜司さんですね。私は」

「私は、リン。リンです」

「りん？ この村じゃ聞いたことない名前だな」

「そうだね。町にそういう人いないの？」

「お前、町にいるとしても特定の一人を覚えている訳ないだろ。常連客なら別だけど……」

しかし、リンは町の子なのか？ どころなく品のある仕草が少し気になった。

「で、落ち着いてきたところ悪いんだけど。なんで追われてたの？」

「え、リンちゃん追われてたの!？」

「あ、えっと……」

慌てた様子に、聞くのはまずかったと今更後悔。

「イノシシにな、そうだろ？」

「え？ あ、はい。そうです」

慌てているのも不自然だったので、助け舟を出してやる。

元々は俺の不注意だが……。

法衣の少女、リンに目配せをする。町で絡まれていたことは黙っていた方がいいよな、訳ありみたいだし。

「あー、今の季節ならいても不思議じゃないけど。村に入って来ち

「やったんだね、気をつけないと」

「はは、畏でも張つとくか」

「ごまかせたかな？」

「今日はもう遅いから、ここで休んでいけよ」

「い、いえ。私もう出ます、これ以上迷惑かけられませんし」

遠慮がちな娘だ。でも、こんな夜中に外へ出す訳にはいかない。

理由はわからんが、集団に追われていたのだから。

「悪い人じゃなさそうだもんね。リンちゃん、私の布団使つていいよ」

「でも、私、行かないと」

「えー」

「ほ、ホントにいいですから」

「遠慮しなくていいんだぞ？」

「兄貴、目に卑猥な意味が込められているように見えるよ」
「なっ!?!」

俺の目、卑猥か？ そんな卑猥か？ 下心丸出しに見えるか、おい。

「リンちゃん気を付けてねー、男はみんなイノシシだから」

「それオオカミじゃねえの？ 男はみんな猪突猛進ですか、あながち間違っちゃいねえけど」

「あ、あの、私はこれで！」

茜に気を取られている間、リンは身を翻して立ち上がりそれこそ玄関へ猛進した。

「お粥、ごちそうさまでした！ それと、助けてくれてありがとうございます！
ございますー！」

別れ際、思い出したように振り返ってお礼を述べると、リンとその声は玄関へ消えていく。

「おい、待」
「……て？」

玄関を抜けると、そこは暗闇だった。月明かりに照らされた夜道だが、妙に暗い。

十秒も経たず玄関へ向かったはずなのに、そこにリンの姿はなかった。

「兄貴？」

「いなくなっちゃった」

「まさかあー。……あれ、本当だ」

茜も信じられないと言った感じで、曇った月明かりに照らされた夜道を眺めていた。

あの翼が黒い理由「き」

夜が明けて、俺は眠気眼でもやることがあった。

「たくあん？」

売りに行くのは明日だが、何をどれくらいの値段で並べるか考える必要がある。それで、今持ち運びが楽そうな食料を見つけた。

「でも、売り場にあっても見栄えがないよな。保存食に見栄えを期待しても仕方ないけど」

見栄えがいいもの、日持ちするものを中心に漁っていたが……たくあんが割かし多い気がする。茜の奴が作り貯めしていたんだろうか。

「どうするかな。にしても、昨日のあいっ……」

リンと名乗ったあの少女、なんだったんだろう。

あの後は割と気にならずにすぐ眠れたが、夜が明けた今では夢でも見たような感覚だ。

「あ、いかんいかん」

新しく並べる商品選びに迷っていたら、他の考え事に手が伸びてしまった。

俺は気分を変えるため、倉庫の外へ出る事にした。

空を仰いだ瞬間、眩しい朝の光が伸びてくる。

「お、やっぱり晴れか」

空が眺めるのが元々趣味だったおかげで身に付いた俺の特技。翌日の天気の予想だ。

オヤジさんにも教えたけど、結構役に立つんだな、これが。

「いい天気だ」

と言っても、俺の思考の中を蠢く謎の少女リンは頭の中を曇らせている。

「……リン、か」

眠ったから昨日の事に思えるが、あれからまだ数刻しか経っていない。

「心配だよな」

「兄貴ー？」

「うおっ」

振り返れば茜。

なんでこいつはボーツと考え事している時に話しかけてくるんだ？

「はあ。またですか」

「仕方ないだろ。リンのことだ」

「あら、一目惚れ？」

「ち、違う！ そ、そりゃ、町の女よりはよっぽど美人だったけどさ」

おい茜、なぜそこでニヤつく。

「ふーん」

「な、なんだよ」

「別にー。それで、何出すか決めた？」

「そうだな、臭いがキツイのはいかん。たくあんは売り払っても大して金にならないし」

「たくあんを馬鹿にするなー！」

「お前、たくわん好きだよな……」

「なぜ兄貴にはたくあんの素晴らしさが理解できぬのか」

「わかったわかった。とりあえず持つて行こう。それで、なんとなく手に取った俺の木刀を下ろしなさい」

茜は大のたくあん好き。毎日毎日保存食のたくあんに手を出しては作り直し、食っては作り食っては作りを繰り返している。

「他に持つていきたいのが六種類。最初は全部少なめに、種類を多く持つて行こうと思うんだけど、いいか？」

「いいよー。余裕があったら試食させて、反応見てきてほしいかな」

「わかった。覚えとく。それじゃ、道場に行くぞ」

「おー！」

村の反対側までやってきた。ここからは村の出入口からも近い。

俺と茜は週に一度だけ、この村長が住んでいる屋敷にて稽古をつけられる。性格には屋敷の傍らにある道場である。

「よし、着いたぞ」

「入っちゃって大丈夫かな？」

「いいだろ」

「おばあちゃん？ 茜だよー？」

村外れにある俺達の家の……何倍もある。とにかくでかい。

敷地を囲う塀は屋敷の門から左右に首捻っても途切れる様子もない。ずっと続いている。

「そういえば、屋敷の中には入った事がないなー。ずっと道場ばかり」

「そうだな」

「私は稽古の時にしか来ないけど、兄貴は結構来てるんじゃないの？」

「何回か、な。掟なんて無視するような悪ガキだったから」

「空眺めてばっかだもんね。おばあちゃんが目の敵にしてるもん」

「なんでだろうな」

「ほら、あれじゃない？ 昔お父さんに、壊された玩具」

「空へ飛ばすやつか？」

「そうそう」

「これが町でいい具合に売れるんだが、村がこれだから作るに作れない」

「ガキだって事である時は見逃されたが、今そんな事したらあの婆に何されるか」

「町で作ってすぐに売れば？」

「材料持っていくのか？ かなり高張るぞ」

「だ、だね」

「あれが村長に見つかった時は怒られたな。掟を守れって」

「……掟は理不尽だと思うけど、どうしてそんなに反抗するの？」

「なんでだろうな」

それがわかったら苦労はないのかもしれない。

「ほら、行くぞ」

「あ、待ってってば！」

門を開け、俺一步敷地内に踏み込んだその時だ。刹那、銀色の軌道が視界端に現れた。

同時に起きた空気の乱れは、恐らく中から吹いた風などではない。

「うおっ！」

「きえええええエエツ！」

前からだ。ふと視線をやると、薙刀を振り回す老婆が金切り声をあげて猛進して来る。

「お、おい待てよッ！」

などと文句を垂れている場合ではない。

老婆は茜を避けるような動きを取り、俺の目の前まで踏み込んでいた。恐ろしいほど速い間合いの詰め方である。

老婆は俺だけを刃の軌道、その延長上に置いた。振り切るように薙いだ一撃は頭を低くしてやり過ぎす。

この一発目が振り終わった直後、刃は返され、再び俺に向けられた。

「お、おばあちゃん！」

呼ばれた本人は、ようやくその薙刀を止める。そして、この老婆はあるうことか俺にだけ聞こえるように小さく舌打ちをした。

「こ、こんの婆」

目の前には地味な着物を羽織り先ほどまで薙刀を振り回していた元気な婆さん。元気すぎる気もするが……。

この人が村の長、倉崎である。

「おー、茜か。来てくれたのかい」

「あ、あははは……」

茜はと言うと、濁いた笑いで村長と向き合っていた。

ここに来た事こそないが、茜は数度村長に会っている。

毎度毎度俺に切りかかって来るが、なんか恨みでもあるんだろうか……。

「なんだい、竜司も一緒かい」

「いつも茜と一緒に稽古してんだろ。なんだ、もうボケたのか」

「……腕が滑っても知らんぞ」

そういうと、絶妙な刀捌きで俺の首元へと薙刀を持っていく。

「や、やめろって!」

「さあ茜や。今日も頑張ろうかの」

「うん」

「ったく」

明らかに違う態度を見せつけられたが、これはいつもの事である。問題はここからだ……。

「この術式の難しいところはここでの」

倉崎と茜は数枚並んでいる術式札から一枚を取り、それについての講義中のようなだった。

俺はただひたすら素振りでもしていると、たった一言である。

「術式札は周囲に何らかの影響を与えるが、これは札自体に効果を付与する」

「うん。これはどんな効果なの？」

「ただの魔除け効果じゃよ。巫女がよくやっておる」

「へえ」

術式知識の俺が聞いてもまったく分からないであろう内容の会話を聞き流しつつ、素振りを続けた。

実のところ、茜は本来学舎での学業を終えている歳だ。

未だに通っているのは、その知的好奇心から術式に関しての情報を先生やこの村長から盗み出そうとしている。

おっと、人聞きが悪かった。ようするに勉強熱心なのだ。

本当は働いてほしいのだが、このまま先生や巫女にでもなってくれば言いつても考えている。生活が幾分か楽になるしな。

そうこうしているうち、素振りの目標である百回を終える。

「終わったぞ」

「はいもう百回じゃ」

「おいおい、適当すぎやしないか？」

「……仕方ないの」

「ん？」

村長は陳列された術式札から一枚を取り、俺の近くまでやってく

る。

「その札で、どうするんだ？」

「これであと百回やったら、休憩しておれ」

そう言つと倉崎は俺の手の延長上、素振り用の木刀にその術式札を貼り、巻き付けた。

「ハッ！」

左手で術式札へと念を送る。術者はこれで札の発動を促すのだが、何をしようと言つのだらう。

「うおっ！？」

突然、体が地面に向かって引きこまれるような錯覚を覚えた。

正確には、木刀が急に重みを増し、握っていた俺はそれに引つ張られたのだ。

「お、重すぎやしないかこれ。なにしたんだ！」

「札に重さを付与しただけじゃよ。それで素振りしとれ」

「いや、これ洒落にならない重さだぞ！？」

重さだけでいつも引いている荷車以上だ。これをあと百回も振れと言つのか。

「その方が鍛錬になるじゃろ。ほら振った振った」

「いーっ、ちッ！」

言われるがまま持ちあげるが、その動作は決して軽やかとか言え

ない。振り下ろす動作は重い所為か 素振りの型としてはあまりに出来ていない。無駄なくできれば恐ろしい筋力だろう、実際のところ 俺では三十回が限界だ。

「ほ、本気でこれを続けさせるつもりかよ」

村長はさつさとやれと言わんばかりにこちらを睨みつけている。なぜだ、今日はいつも以上に厳しいぞ。

そんな疑問をいだきつつ、俺は超重量の木刀を延々と素振りさせられた。

「ちょっと厠に行ってくる」

「許可する」

許可されなくても行くに決まっている。

「あーそうじゃ、ここの厠は修理中じゃ」

「え、じゃあどうするんだ」

「屋敷の方まで歩け。場所がわからなかったら、その辺にいる使用人に尋ねるがいい」

「わかった」

重さの増した特製木刀を壁に立てかけ、出口へ。

屋敷へと向かう途中、道場の方から鈍く響く音が聞こえてきた。立てかけた木刀が倒れたんだろうか。

戻ってもあの木刀だけは握りたくないと往生際の悪い事を考えつ

つ、屋敷の縁側へ上がる。

広い。外から見てもやはり広いが、中から見てもその広さは圧巻だ。

適当に進もうかとも思ったが、素直に縁側で最初に見かけた使用人に厠を訪ねる事にする。

「あの」

「おう、天木。今日は稽古か」

「そうです」

「お疲れさん。いやあ、昨日は急に押し掛けたみたいで、悪かったな」

あ、この人、昨日の夜いた男衆の一人か。

「いえ。それで、あの、山賊は掴まりました？」

「いや、まだだ。遠くに逃げたのかもな」

「そうですか」

「ま、精々気を付けてな」

「それである、厠の場所を聞きたいんですけど」

「ああ、道場のは壊れてるんだったな。屋敷の厠なら、奥行って右だ」

「ありがとうございます。それじゃ」

お礼の会釈を交え、俺は言われた通りの道順を辿った。

用を足し、道場へ戻る途中。ふと何かが目に止まった。

中庭の茂みに引つかかる一枚の紙切れ　　いや、術式札か。

「なんであんなところに？」

見たところ普通の術式札だけど、かなり古びた紙だな。

「風で流されたのか？」

あたりを見回すが、この辺なんだろうか。

「あれ」

また、視界を端で何かを捉えた。今度はのは術式札よりも色が濃く、見つけづらいのだった。

「羽根……？」

『影だけだったから、そんなことまではわからねえよ』

あいつから預かった黒い羽根とそっくりだ。

でも、なんでここに？

袖から預かった黒い羽根と見比べてみると、今拾った羽根は少し拉げているように思える。しなびた花のように瑞々しさが無い。

預かったのは抜けた羽根とは思えないほど、綺麗な形と色をしている。

「抜けて時間が経ったのか？」

そうだとすると、ここに落ちていた羽根の方が抜け落ちてからの時間が長いのだろう。

考えていても仕方ない。道場に戻ろう。そして、おもむろに縁側へ視線を戻したその時だ。術式札の貼られていたと思われる小さな柱を見つけてしまった。

術式札の形に抜き取られたような、柱の変色具合が遠くからでも見てとれる。剥がれ落ちて、羽根と同様に風で動かされたんだろうか。なら、この二つの関連性って……。

「あー、やっぱり兄貴ってばこんなところで休んでるし！」

「ッ!？」

咄嗟に声をかけられ、俺は拾った術式札を袖口に忍ばせた。

「ほら、さつさと戻るよ！ おばあちゃん待ってるよ」

「あ、ああ」

空を仰いでいる時以外もいきなり声をかけられたのは久しぶりだ。心臓に悪いな。

「早く早く」

と茜に急かされ、道場へと踵を返す。

茜が背を向けていることを確認し、忍ばせていた術式札を一瞥。

(この術式札、何に使うんだ？ それにあの黒い羽根がなんで倉崎の屋敷に?)

練習で村長に問おうかとも考えたが、あの有翼人嫌いに羽根など見せたら何されるかわからない。

その後は何事もなく稽古を終え、俺達兄妹は帰路についた。

あの翼が黒い理由「貳」

翌日。地獄の稽古、もとい扱きを耐え抜き、次の日は商売。この連携にはどうにも慣れない。体のあちこちが悲鳴を上げている。

そんな限界の体に鞭を打ちつつも、茜が作り貯めしていた漬物や惣菜を荷車に積み、町市場での商売に勤しんでいた。

そして、結果から言えば保存食の売れ行きは順調。いつもより荷車は重かったが、飛ぶように売れていく漬物や惣菜達を見て疲れが吹き飛んでいく。

『試しに食わせてくれ。美味かったら買う』

町について早々にこんな事を言い出した客がいた。量ならあったし、売れなければ始まらない。

了承し、客がたくあん一切れを手掴みして口に運ぶと……。

『美味いッ！ うちのかーちゃんよりうめえ！』

と叫ばれた瞬間は驚いたが、そのおかげで茜特製の保存食達が一気に売れ始めた。

……茜の目に止まる商品はまず売れるらしい。恐るべし自家製たくあん。

「今日は好調だね」

オヤジさんだ。

「え？」

「売れ行きだよ。それにいつもの雑貨が全然ねえじゃねえか」

「あ、ああ。妹の腕がいいんで許可もらって並べてるんですよ。他の商品も売れなかつたし、物は試しと思って」

「その妹、茜ちゃんだっけか。村に置いてくには惜しいなあ」

「はい？」

「髪飾りの形とか色合いは、その子があんちゃんに言って作らせたんだろ？」

「ええ。俺はそれを売ってるって感じです」

「俺も何かご教授願おうかな」

茜の髪飾りと言い保存食と言い、面白いくらいに売れていく。オヤジさんも驚きを隠せないみたいだ。あいつは商売の神にでも好かれてるんだらうか。

保存食と髪飾りしか持って来なかつたおかげか、商品すべてが売れてまった。店を閉める時間になってが列ができてしまった為、帰るのはいつもより遅い時間になってしまった。参ったな、茜は先に帰っているだらうか。

でも保存食と髪飾りだけだと、いまいち利益が出ない。もう少し量を持ってこよう。

「つつか、荷車軽っ」

二刻以上を費やして毎日毎日村から町を往復しているが、今日は異常なまでに軽い。

積み荷が全部売れたからな。財布は結構重いけど。

「やばい、顔がニヤけてきた！」

荷車が軽いおかげか、足取りは順調。だが辺りはすっかり暗くなり、未だ人が通らない山の中を歩いている。いつもならここら一帯は陽のあるうちに抜けるのに。

こんなところでニヤつくのも怪しいが、もっと怪しい連中が辺りにいるかもしれん。

「荷車は軽いし、少し急ごう」

荷車を引いて村にも戻る。歩く速さはいつもより早い、いつもは多少売れ残って重みが残るからな。

「ん？」

村まであと一里と言うところで、暗がりの道にいくつかの明かりが灯る。

「この辺に民家はないはずだけど」

ゆらゆらと蠢くそれは、俺の方へと進んできた。

揺らぐあの火は妖怪の類でもない。恐らく、松明だろう。第一、幽霊や妖怪なんてただの噂だ。毛ほども信じてはいない。

が、堂々とそれを掲げている様子から、山賊じゃないのは確かだ。わざわざ目立つ真似はしまい。

俺の積み荷や財布が目的なら、暗がりから奇襲して、盗るものを盗るはずだ。

「っとー！」

光が近づいてくる前に、荷車と共に脇の茂みに滑り込む。荷車を奥へ追いやり、俺は身を隠せる茂みに座り込んだ。

『クソツ、どこにいやがる!』

『このところ毎日だぞ、また見つからなかったら倉崎様になんと言われるか』

(あれは……昨日の男衆。倉崎んとこの使用人だ)

倉崎。村長の性と一致する。その使用人がこんな夜道になんて……?

『チツ。とにかく、誰かに見つかる前に探し出さず。手負いだ、飛べようと飛べまいと遠くまで行けん』

……。
男衆と松明の光が遠ざかるのを待って、俺は荷車を元の道に戻した。

「あの婆、一体何考えてやがる」

あの村長は確かに優秀だ。こんな辺境の町を隔離しているというのに、害一つ及ぼさない。

害と言えば、理不尽にも思える未成年への村内軟禁と有翼人への悪意ばかりが目立つ。あと俺への明確な敵意。

「とつと帰った方が良さそうだな」

男衆達は、やはり……リンを探していたのだろうか？

……。

村の入口に茜の姿はなかった。すぐに家へ向かうことにした。

「帰ったぞ」

「兄貴！」

俺が戸を開けるや否や、茜が俺の元へ走ってきた。

「どうした？ そんなに兄貴に会いたかったか？」

「じよ、冗談言ってる場合じゃないよ！ そうじゃなくて！」
「？」

茜の様子がおかしい。

そう感じ取るのに、総じて時間はいらなかった。

「何があった」

「リンちゃんが！」

「リン？」

部屋の奥を覗き込むと、そこには布団が敷かれていた。

就寝時間は近かったが、それでも茜は俺が返ってくるまで眠らない。そう言う奴なのに……。

「!？」

布団の布が小さく揺れた。

「リン、か？」

「う、うん……倒れてて、怪我もしてたから……」

『チッ。とにかく、誰かに見つかる前に探し出すぞ。手負いだ、飛べようと飛べまいと遠くまででは行けん』

胸糞悪い台詞が、頭の中を掠めた。

「どんな怪我だった？」

「そんなにひどくない。かすり傷、でも一緒に足を挫いたみたいで」

「軽いのか、そうか」

「わぶっ」

俺は茜の頭に手を乗せて、そのままくしゃくしゃと撫で回した。

「あ、兄貴！ 痛いつてば」

「あ、ああ。悪い。でも、よくやったな」

「う、うん。リンちゃん寝てるから、様子見るなら後でね」

「わかった。起きたら教えてくれ」

男の俺が傍にいても仕方がないよな。ここは茜に任せよう。

数刻もせず、リンに動きがあった。

「兄貴！ リンちゃん起きたよ！」

……。

茜の声で、空を眺めていた俺はすぐ部屋の中に戻っていった。

「起きたか」

「竜司さん」

「怪我は平気か？」

「傷口は塞がりました。掠り傷でしたし」

「まあ、安静にしてろ」
「……はい」

先日はこの家から逃げるように出ていった彼女。今も、彼女はあいつらに追われている。傷を負ったままで……。

「帰ってくる途中、倉崎家の使用人達がいた」
「!?!」

カマをかける必要すらなかった、反応がわかりやすすぎる。

「兄貴？」

「俺が見たのは二人。たぶん他にも何人かに分かれて探してるんだろう、手負いの女の子を、な」

「奴らは、お前を追っていたのか？」

畳みかけるように、布団で半身を起こすリンに話しかける。

「事情があるなら言ってくれ。どうして逃げたりしているんだ」
「それは……」

リンの浮かない表情を見て、それはだんだん俺の背中に押し掛かってくる。

「無理には言わない。ただ……乗りかかった船だ、ほとぼりが冷めるまで家にいていいし、

ただ事情を話してくれる気になったら、俺か茜に相談してくれ」

「ごめんなさい」

まだ言いたくないのなら、それでもいい。
少なくとも、茜はリンをまったく疑っていないようだ。

「助けたんだから、ありがとうだと思っけど」

「え、その、えっと……」

茜のイタズラっぽい台詞に戸惑い気味の様子だ。

「ありがとう、茜さん」

「他人行儀だなあ。呼び捨てでもいいんだけど」

「でも、そんな」

「リンちゃん」

何やら茜が怪しい声でリンを誘惑しようとしていた。何コイツ。
そういう趣味があったのか？

「茜、って呼んで？」

「え」

「ほらほら。呼び捨て呼び捨て」

「あ、あか、ね。あうう、これちょっと恥ずかしいんですけど」
「ぐはっ」

茜が俺の方に振り向く。

「兄貴、超かわいいよ！ リンちゃんてば超かわいいよ！」

「……興奮するな」

「え、えと、恥ずかしいんですけど」

「じゃあ、ちゃん付けでいいよ。私もそうしてるし」

「あ、茜ちゃん？」

「そうそう。いいねー、こっちのが呼びやすいでしょ？」

笑顔を崩さない茜に対し、リンは少し困惑しているのか俯き始めてしまった。

「お友達は」

「え？」

「お友達同士では、こういった呼び方が流行っているんですか？」

「流行ってるっていうか、普通はそうだよ。さん付けなんて友達にはしないよ。ね、リンちゃん」

「お前ご機嫌だな」

「友達増えたし」

「そうかい」

「友達」

リンはまた何かを考え込むように俯いた。

「私が友達じゃ嫌？」

「そ、そんな事は」

「嬉しいねー。まあ私と友達って事は兄貴も友達って事さ」

なんか俺オマケみたいに扱われている。

「え、えと竜司ちゃん？」

「いや、それはなんか違うぞ」

「そ、そうだね」

「竜ちゃんですか？ 確かに、こっちの方が言いやすいです」

男にちゃん付けするのは、子供の時とおばさんだけだぞ。この子は少しばかり抜けているのかも知れない。

「竜司でいい。さん付けしても構わないけど」

「それは、私と友達になりたくないって事ですか……?」

……そうきたか。

「違っつて。……友達だ、変わりに俺がお前を呼び捨てにする」
「り、リン」

うわ、なんかこれ恥ずかしい。

「兄貴、目が卑猥」

「もう何も言っつな」

「くすくす」

茜がその笑い声に惹かれて、リンを見据える。

「リンちゃん」

「え、えと。何、茜ちゃん?」

ニヤつきながら、茜は自分の手をリンに向かって伸ばす。
法衣の少女に差し出された掌に、当の本人は多少混乱していた。

「手、乗せて?」

茜に言われた通り、リンはその小さな手に自分の掌を乗せるように置いた。

指に力を入れて握ると、リンもそれに習う。

「友達。友達つてのいつの間になってるものだけど、こうした方がわかりやすいよね?」

「は、はい」

「よろしくね？ 他所、怪我してない？」

「だ、大丈夫です」

「もー、女の子同士なんだから恥ずかしがらなくてもいいでしょ？」

あの、俺がいるんだけど。

「で、でもこれは」

「リンちゃんってば我慢しちやいそうだからダメ！ さっきだって自分で歩けるって言って倒れそうだったじゃん」

「さっき？」

「あ、リンちゃん村の入口で倒れてたの。それでここまで運んできたんだけど……」

「かすり傷と捻挫でそんなになるか？」

「気絶していましたから。あ、茜ちゃんもう大丈夫」

一つ違和感があった。

布団に入ったまま法衣を着ている事。

「せめて寝るときくらい法衣くらい脱いだらどうだ？ 男衆から顔を隠すためのものだろ、それ」

「こ、これは……」

リンが目を見送る。法衣はどうあっても脱ぎたくないらしい。

「茜の服持ってくる。それでいいだろ？」

「……はい」

着替えに同室するわけにもいかないの、俺は玄関を抜けて外にいよいよ。

「兄貴、とつとと出てけ」

「今出ていくよ」

「ふっふっふっふ……」

なんだか怪しい笑いが聞こえた。

俺が外に出て、暗くなつた空を見上げ始めた直後。

『きゃ、ちよつと茜ちゃん!?!』

『お着替えの時間ですよー』

『ひ、一人でできるから茜ちゃんも外に』

『いいんだつて。さ、さ、法衣洗つてあげるからさ、脱いでつてば』

……。

つて、なんで俺は聞き耳立ててんだよ!

「少し離れるか」

二歩進んで二人の会話に間が空いた気がした。

『だ、ダメッ!』

控え目だった声から豹変し、リンの高い声が外にまで響いてきた。

多少迷いはしたが、玄関へ向き直つた。

「おい茜! フザけるのも大概に」

戸を開けるつもりはなかった。

強く戸を叩いて、茜を注意しようと思いつつての事だったのだが、そんな考えとは裏腹に戸は横へと流れる。

「リン？」

開いたのはリン自身だった。

「り、リンちゃん。ごめん」

「いいんです。こうして接していれば、わかることでしたから」

俺や茜に表情を見せまいと俯くリン。が、茜の足元には法衣が転がっている。

リンは法衣の下に服を着ていたようだが、それは貸し出された茜の服ではない。まぎれもなくリン本人の服だ。

そして、リンが法衣を脱ぎたがらなかった理由は……。

「リン、お前有翼人だったのか」

「……………」

背中から生える大きな黒い翼。

黒い翼を持つ有翼人は、初めて見る。

恐らくリンは、これを隠すために法衣を着ていたのだろう。

追われていたのは、有翼人だったから？ この村は有翼人の出入りを禁止している。それに、この前男から渡された黒い羽根の一件だつてある。

「リン、ちゃん」

茜が法衣を拾い上げて、リンに手渡そうとする。

リンはそれを俯きつつ受け取り、そのまま黙り込んでしまった。

「珍しい色、だよな」

「ッ……」

リンは俺を突き飛ばし、そのまま駆け始めた。

「いッっ」

「……ッ。」「ごめんなさい」

謝罪して、再び走り出す。

俺は、その後を追えなかった。

リンはすぐさま飛び立ったらしく、翼の羽ばたく音が遠くから微かに聞こえて来る。

闇に溶けるように、黒い翼を広げてゆっくりと消えていった。俺達に寂しげな羽ばたきの音だけを残してだ。

「茜」

「私のせい、だよな」

「いや」

立ち上がり、今にも泣きそうな茜の傍に寄る。

「この村の事情を知っていたのかもな、だから法衣を付けていたんだろ」

「お前、有翼人を見るのは初めてだったけ？」

「うん。リンちゃんが初めて」

「どうだった？」

「びっくりした、けど」

「けど？」

「……………」

茜は黙りこんで、リンの消えていった夜道を見据えた。そこには誰もいない。

ずっと続くのではないだろうかと言っ沈黙を破ったのは、独り言
である。小さな歯の眩きだった。

「リンちゃん……なんで泣いてたんだろっ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1140z/>

あの空が青い理由

2011年12月11日21時48分発行